みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

# Autonomous Tourism and Ethnic Art : A Case Study in the Republic of Cameroon.



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2009-04-28<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 下休場, 千秋<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.15021/00002113 |

# 自律的観光と民族芸術：カメルーン共和国の事例を中心に

下休場　千秋
（大阪芸術大学芸術学部）

# Autonomous Tourism and Ethnic Art : A Case Study in the Republic of Cameroon.

Chiaki Shimoyasuba
(Osaka University of Arts)

２１世紀を目前にして、観光のあり方についてエコツーリズム、エコミュージアム、ヘリテージツーリズムを始めとする様々な新しい概念が提案されている。本論では民族芸術という観光資源の魅力とその保全と活用に関する課題を明らかにし、自律的観光のあり方について考察する。

中央アフリカのカメルーン共和国・北西州にはティカール族を始めとする２００以上の神聖王を中心とする首長国が現存し、民族芸術に関する豊かな文化遺産を継承している。事例として、これらの中の一首長国・バフツにおいて現在進行中である王宮の修復と博物館設置計画を取り上げる。

結論として、自律的観光においては自律的地域社会の存在と異文化理解を目的としたインタープリテーションの重要性が指摘できる。

The 21st century is almost upon us, and various, new, general ideas related to tourism, such as ecotourism, ecomuseum, heritage tourism and so on, are beginning to be proposed.In this paper, the attraction of ethnic arts as tourism resources and issues about their conservation and utilization are explained, and the nature of autonomous tourism is considered.

The more than 200 chiefdoms that have been formed by the Tikar tribe and others exist and have passed on their rich cultural heritage of ethnic arts in the Northwest Province of the Republic of Cameroon. In this paper, the focus is on the restoration of the royal palace and a project to establish a museum in the Bafut fondom.

In a conclusion, the importance of the existence of the autonomous community and of

the interpretation of understanding different cultures is pointed out.

1. はじめに
2. バフツ王国の地域変容
2.1 近代国家における神聖王と首長制社会
2.2 バフツ王国の歴史文化
2.3 文化遺産としてのバフツ王宮
2.4 観光資源としての民族芸術
3. バフツ王宮の修復・博物館設置計画
3.1 計画の概要
3.2 博物館設置計画
3.3 公開博物館の展示用収集品
3.4 神聖収蔵館の所蔵物
4. おわりに

Key words: museum establishment, ethnic art, tourism, chiefdom, divine king
キーワード：博物館設置、民族芸術、観光、首長制社会、神聖王

## 1. はじめに

社会資本整備や経済発展により、地域の自然環境や生活文化は歴史的に変容してゆくものであるが、その中で地域の活性化、地域遺産の保護、環境保全の面から観光の重要性が増してきている。本稿では民族芸術の観光資源としての価値について地域変容の視点から検討を加えることにより、地域社会における観光のあり方について考察する。

観光のあり方については、エコツーリズム、エコミュージアム、ヘリテージ・ツーリズムをはじめとする様々な新しい概念が提案されてきている。そこで重視されていることは自然・文化遺産の保全、地域住民の主体性、観光客の自覚等の問題である(海津・真板 1999:27-28)。例えば、エコツーリズムにおいて観光資源の適切な保全と利用を図るためには、各主体ごとにガイドラインの設定が不可欠となってくる。一口でいうと観光関連主体のモラルが問われているのである。

観光を地域住民と異なる文化をもった観光客とが接する社会現象であると考えるならば、そこにおいて双方の主体が相互に異文化と自文化を理解しようと努力することが重要になる。特に、本稿において取り上げる民族文化を対象とするヘリテージ・ツーリズムにおいては、「文化の商品化」をはじめとする地域変容における文化の変容問題が発生する可能性が高い(石森 1991:20-21)。文化の商品化自体が悪いのではなく、地域の変容において変容して良いものといけないものとを自覚・判断することが地域住民に求められてくるのではないだろうか。

以上のような問題意識のもとに、中央アフリカ・カメルーン共和国の首長国における民族芸術を中心とした現地調査結果に基づき自律的観光のあり方について述べることにする。

## 2. バフツ(Bafut)王国の地域変容

### 2.1 近代国家における神聖王と首長制社会

1960年代初頭にフランスとイギリスの植民地から近代的独立国家となったカメルーン共和国であるが、この地域にはそれ以前から数多くの首長国が存在していた。首長国の特徴は領土を政治的・司法的・軍事的・宗教的に統治する神聖王とその王権を支える複雑な社会組織にあった。近代国家においてこのような伝統的首長国の政治的・司法的・軍事的権力は国家に取って代わられたが、神聖王の宗教的な権威は今も大きく変化することなく維持されており、首長制社会組織も基本的には比較的変化が少ないと考えられる。

カメルーン共和国の北西州にはティカール族の一首長国・バフツをはじめ２００ほどの神聖王を中心とする首長国が存在しているといわれている。それらの神聖王と首長制社会組織の宗教的基盤は当然のことながら地域の土着宗教にある。しかし、アフリカの宗教は多様であり、基本的には土着宗教、イスラム教、キリスト教に分けることができる(嶋田 1992:119-120)。バフツ王国の主要な宗教はキリスト教であるが、神聖王の観念の基盤である土着宗教との混交がみられる。土着宗教を基盤とする北西州の神聖王の中にはキリスト教会で礼拝する王もいるという。また、西州のバムン(Bamoun)王国のように、王自身がイスラム教に改宗した例もある。

アフリカの土着宗教を理解するためには人々の宇宙論なり世界観の体系を知る必要がある。例えば、ヤーン,J.（1987）はアフリカの伝統的世界観として、ムントゥ（Muntu）＝「人間」、キントゥ（Kintu）＝「事物」、ハントゥ（Hantu）＝「空間と時間」、クントゥ（Kuntu）＝「様相」の４つの基本概念を示している。さらにこれらの全ての範疇に共通する語幹（NTU）について次のように説明する。「NTU は、直ちに普遍的力なのである。とはいえ、普遍的力としてのNTUは、その発現であるムントゥ、キントゥ、ハントゥ、およびクントゥから離れて現れることは決してない。NTUは存在それ自体であり、宇宙の普遍的力である。そしてこの普遍的力を、この力のさまざまな発現から抽象しうるのは、ただ近代の、純理的思考だけである。NTU とは、存在と存在する物とがその力によって合体するようになる」(ヤーン 1987:115-116)。

カメルーン共和国において現在を生きる神聖王の観念とは、王自身を人間界と自然界と霊界とを結びつける神のような聖なる存在と考える観念である。このような王の観念と地域の人々の伝統的世界観に支えられて、バフツの神聖王と首長制社会組織が維持されているといえよう(端 1987:128)。

神聖王と首長制社会は宗教的観念に基づいて存在する一方、近代国家においてその文化的

伝統を維持するためには、社会的・経済的に様々な困難に直面している。例えば、国政や地方行政との関係、首長国間での社会的紛争、王国の文化行事・王家の生活・王宮の維持管理に必要な人材・情報・資金の確保などがあげられる。これらの課題に対して、バフツや他の北西州の神聖王達や首長制社会は色々な方策を検討している。

例えば、バフツでは1972年からバフツ・マンジョン(Bafut Manjong)という首長国の領土外に住むバフツ出身者達の組織を結成し、定期的に会合をもっている。この組織はさらにいくつかの内部組織で構成されており、領土内の神聖王と伝統的首長制社会組織を地域外から援助する役割をもっている。また、1997年6月には200人以上の北西州の神聖王が参加して「北西州神聖王連合」(North-West Fon's Union)が結成された。この連合の目的は首長国の利益保護・文化保全や首長国間の紛争解決・相互交流などであり、会長にはバフツ王が選任された。

本稿で検討するバフツ王宮修復・博物館設置計画は、このような現状にある伝統的首長国がこれまで伝承してきた王宮と民族芸術を文化遺産として、あるいは観光資源として保全活用しようとする新しい動きの一つである。このような計画の必要性がいわれだした背景には閉鎖的で固定的であった伝統社会に外部からのまなざしがそそがれる機会が多くなってきたことや、王宮を中心とする文化遺産の維持管理が少しずつ難しくなってきているという事情があると考えられる。この計画の実現に向けての課題を明らかにし、ティカール族の民族芸術を如何に保全活用するかを考察することにより、カメルーンにおける今後の自律的観光のあり方を検討したい。

### 2.2 バフツ王国の歴史文化

バフツ王国は１６世紀初頭に北部から現在の地に移動してきたといわれている。1968年に即位した現在の王・アブンビ２世（Abumbi Ⅱ）は記録上では第11代目のバフツ王である。現王は王国内の専門学校長であり教育や王国の文化に大変造詣が深い人物である。

バフツやティカール族の土着宗教では、神聖王の観念からもいえるように、人間界と自然界と霊界とがより大きな世界の一部を構成しており、それらの世界に存在する全てには「普遍的な力」(NTU) が働いていると考えているようである。この普遍的な力をここでは「目に見えない力（道理)」と表現することにしたい(Asombang 1999:85-56)。これは具体的には「霊魂、祖霊、精霊、聖なるもの、神聖なるもの、神、生命、自然作用」などの力としてとらえられているようである。バフツ王国の社会組織・祭礼・王宮・民族芸術に接するたびに、地域の人々の宗教観の根底において、この「目に見えない力（道理)」の働きが理解されているように思われる。例えば、様々な祭礼時には住居や王宮内の先祖を祀る場所あるいは集落内の聖地において丁寧に供儀がなされる。

バフツのキリスト教会の一人の牧師レブ・エロン・シュウ氏(Rev Aaron Su)は世界観につい

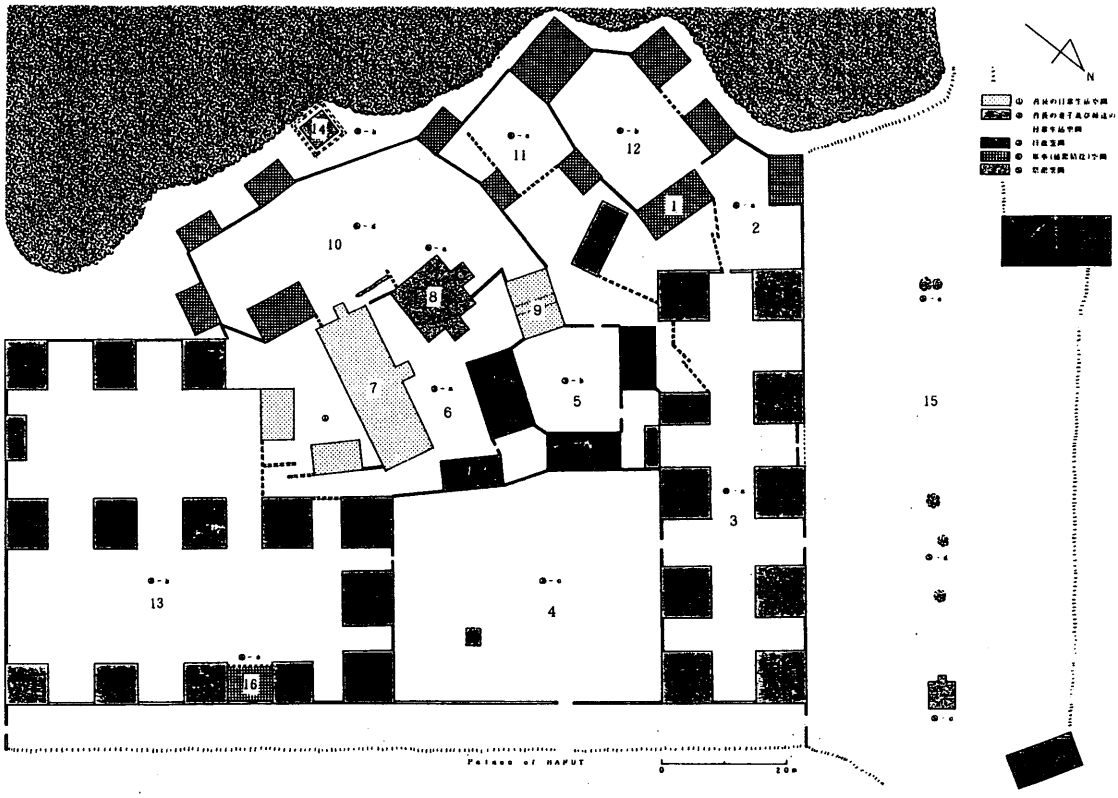
て次のように語ってくれた。「最初この世界の創造神（Nwingong）は人間の近くにいた。そのうち創造神は人間から離れて空の上に行ってしまった。人間の体は仮の姿であり、魂こそ永遠のものであるが、魂には良い魂と邪悪な魂の２種類がある。神から遠く離れ、これらの魂に取り囲まれた中で生きている人間を正しい道、神が示す道に導いてくれるのが祖先である。我々は祖霊を祈り供儀することにより離れてしまった神に少しでも近づくことができる。」このような世界観は、先述した「普遍的な力」や「目に見えない力（道理）」の働きを信じているバフツ王国の人々の一般的な考えなのかも知れない。今後、バフツにおける民族芸術や王宮をはじめとする文化遺産の保全と活用を考える際には、このような地域の人々の価値観を少しでも理解することが重要であろう。

### 2.3 文化遺産としてのバフツ王宮

バフツの王宮内には数多くの建築物が整然と並んでいる（写真１参照）。草葺きのティカール族の伝統的建築様式で建築された歴代王の祖霊を祀る神殿をはじめ、第一次世界大戦後のドイツ植民地時代に建てられた焼成タイル屋根をもつ王家の建物群が美しい王宮の風景を構成している（図１参照）。それらは観光資源としての価値を有するだけではなく、空間的配置や空間機能を理解することにより、神聖王と首長制社会組織の特性を理解する手がかりを与えてくれる。

王宮の最も奥まった空間には、首長制社会の中心的組織である秘密結社・クゥイフォ（kwifor）の有力メンバーが会合をしたり、王国の重要な決定事項について王と話し合ったりする建物がレンガ塀で囲われた中庭に面していくつも建っている。王宮のその背後は秘密結社のメンバーが薬草を採ることもある鬱蒼とした森に覆われている。王宮の中心部には一段と背の高い草葺き屋根の神殿があり、その周囲の空間は建物とレンガ塀によりいくつもの中庭に区分され、それらの建物と中庭は王が主催する様々な祭礼に利用される。王は王国で最も重要なこの神殿を守護する立場にあり、この付近のいずれかの建物で生活するといわれている。より王宮の入り口に近い空間は、王国の人々が様々な問題について王と話し合いをする行政的利用が中心の場所である。さらに、王宮の周囲には王妃と王家の子供達の生活空間がその人数の多さに比例して広がっている。そして首長制社会組織における様々な地位により、これら王宮内のそれぞれの空間へ入れるかどうかがタブーとして厳格に定められているのである。

王宮の空間構成を読み取ることにより、神聖王と秘密結社の関係が表面的には対立的でありながら、よく言われるような「王は秘密結社・クゥイフォの息子である。」という関係が理解できるのである。また王宮内の広場では、毎年１２月に王国内の歴代王の祖霊が眠っているといわれる滝や川において供儀が執り行われた後、盛大に「王の舞踏祭」（The Mandele)と




バフツの王宮　ntouh bufu

1　首長の墓　nufung
2　墓の中庭　nehu nufung
3　女性の空間　atuntoh
4　入口の広場　ayoh
5　中庭　nsan
6　中庭　nsantoh
7　首長の家屋　ntoh inboh
8　首長の墓　achum
9　倉庫用建物　atah
10　王家の結社の空間　njuntoh
11　会合の場　nchungle
12　村人の結社の空間　abe kuifoi
13　女性の空間　ntintoh
14　村の神　ndabannikan
15　広場　nsanfou
16　王家の結社の空間　nchunda

図1　バフツ王宮の平面図（筆者作成）

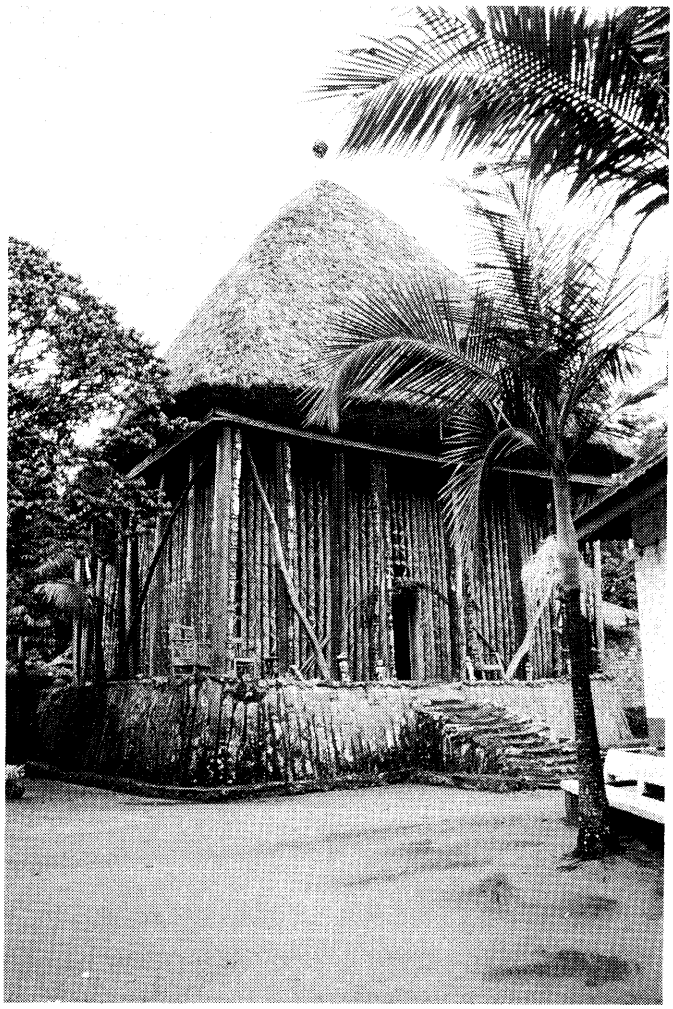


**写真1**　バフツ王宮内にある歴代王を祀る祖霊殿・アチュム（Achum）（筆者撮影）

いう新年祭が開催される。このように王宮の空間構成と機能は、神聖王を中心とする首長制社会の世界観や宗教観をもとにした一つの小宇宙をみごとに再現したものであるといえる(ソー 1987:123-125)。

私が調査中にも欧米・アジアなどの海外やカメルーン国内から毎日のように観光客がこの王宮を訪れていた。宮殿内には王の使者がおり、宮殿を訪問する観光客のガイドを行う。王宮への入場料が一人 1,000CFA (約２００円)、仮面ダンスの見学料が 10,000CFA (約 2,000 円) から 25,000CFA (約 5,000 円) と決められている。神聖王の王宮が今では観光資源としての価値を持ち始めているのである。

### 2.4 観光資源としての民族芸術

バフツの民族芸術は、創造神を頂点として祖霊などの様々な霊魂の存在を信じるアニミズム的な宗教観に基づき、神性をもつとされる王と秘密結社をはじめとする複雑な社会組織が執り行う様々な祭礼において使用される仮面や人像や楽器であったり、舞踏そのものであったりする。そのためそれらは宗教的目的を持って使用されることを前提として制作されたものである。しかし観光資源としての民族芸術には博物館で鑑賞したり土産物として購入するといった本来の宗教的な制作・使用意図とは違う商品化が伴うのである。王宮やそこで使用される民族芸術が文化遺産や観光資源としての価値をもちだしたバフツにおいて、今後対応していかなければならない課題がここにある。

北西州の州都・バメンダなどの都市では神聖王を崇める首長制社会において使用することを目的に制作される民族芸術の模造作品が土産物として販売されている。それ自体問題はないのであるが、文化の商品化でより重要な問題は、商品経済が浸透することにより、民族芸術を生み出してきた人々の世界観や宗教観が変化してしまうことであろう。人間に対して「目に見えない力 (道理)」を働きかける霊魂の姿やイメージを表した民族芸術の意味を理解する人々がいなくなることが、観光資源としての民族芸術の価値をも、なくしてしまうことになるのである。

先述したように、バフツ王国では王宮の修復と博物館設置計画が進行中である。民族芸術の展示を前提とした博物館の設置が、使用するものから鑑賞するものへと民族芸術の社会的役割を大きく変化させることになる。民族芸術に関するこの課題について、次章において詳細に検討していくことにしたい。

## 3. バフツ王宮の修復・博物館設置計画

### 3.1 計画の概要

この計画は、北西州において代表的な文化遺産としての価値を有するにもかかわらず老朽化し始めているバフツ王宮の建物を修復すると同時に、新たに博物館を設置する目的で7年前から始まったものである。現在までに旧宗主国であったイギリスとドイツからの政府援助により計画のおよそ半分が達成されたといわれている。しかし資金難から計画が滞ったために内容の再検討がなされ、2000年3月に先述したバフツ・マンジョンの特別幹部会議が王の臨席を得て王宮内で開催された。

その議事録によると計画内容は次の5つに大別される[(1)]。①王宮内広場の観覧席・門の新設・修復、②王宮内建築物の屋根の修復、③王宮の排水施設整備、④博物館の設置、⑤神殿の修復。これらの総予算額は約74,000,000CFA（約14,800,000円）で、財源を確保する方針として、王の国内巡行、寄付依頼記事の観光パンフレットへの記載、全ての成人男女からの徴収等が決められた。今後3年間にこの計画を実現させることが出席者全員によって確認された。

王宮の修復・博物館設置という現代的課題に取り組む様子から、神聖王と首長制社会の変容ぶりを垣間見ることができる。特に王国外に居住するバフツ出身の各界の名士に資金・情報提供の多くを期待していることが注目される。王宮の維持管理といった王国の重要案件に対して王国内の取り組みだけでは限界があり、バフツの場合外国政府に対しても援助を期待しているのである。神聖王国が現代社会を生きていくためには、バフツ出身者の世界に広がる人的ネットワークが最大限に利用されているのである。文化遺産や観光資源として王宮を修復し博物館を設置するという計画内容や、その計画を実現しようとする手段を見ていると、地域外に開放された自律的地域社会の姿が浮かび上がってくるのである。

### 3.2 博物館設置計画

博物館の設置は王宮修復計画の一環として立案されたものである。この計画は王宮内に現存する三つの既存建物を改装あるいは修復して利用する総予算額が約3,300,000CFA（約660,000円）の内容である。三つの博物館といっても一般に公開されるのはゲストハウス(写真2参照)を改装して新たに開設される公開博物館のみである。残りの二つの建物は原則的に非公開の博物館である。その一つは普段には一般の目に触れることがタブーとなっている仮面や人像などを収蔵する神聖博物館（収蔵館）で、もう一つは歴代の王の祖霊が祀られている神殿である。これら3種類の建物内に収蔵される民族芸術の品々は、神聖王や秘密結社を代表とする様々な首長制社会組織の構成員が祭礼や儀式において使用するものや、バフツの

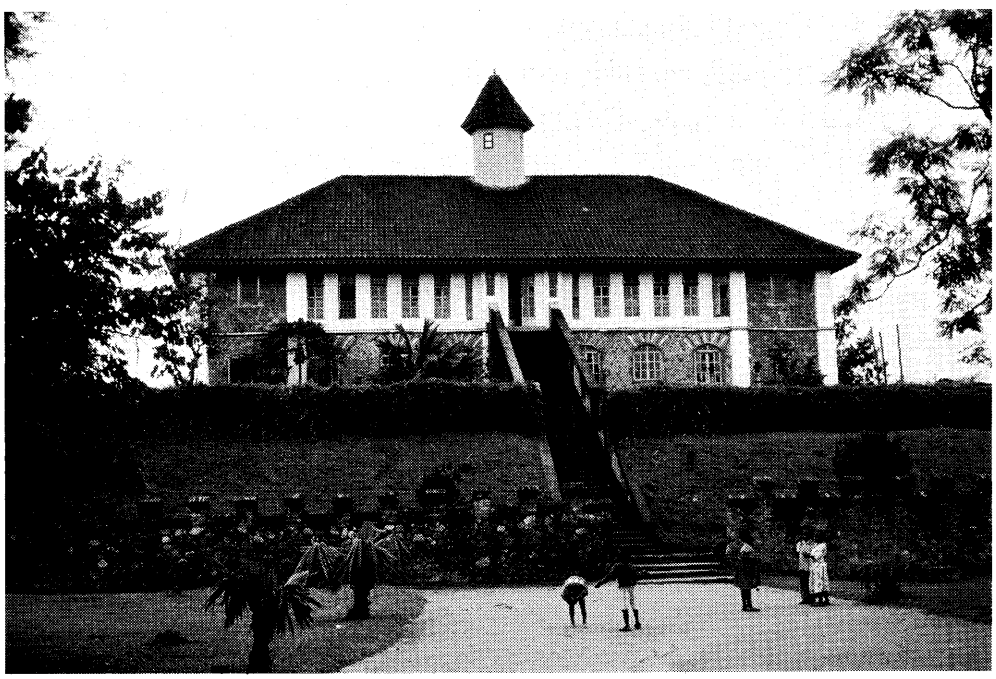


写真 2　博物館に改装される予定のゲストハウス（筆者撮影）

人々の観念的世界観において人間に対して「目に見えない力（道理）」を作用させる「霊魂、祖霊、精霊、神」などの姿やイメージを造形した木彫り像などである。

このように王宮内に３種類の博物館を修復または新設する計画が必要な理由は、各々に所蔵される民族芸術の性格に由来している。例えば秘密結社の特定の構成員が特定の儀礼において使用する物は、それ以外の時空間において本来の目的以外でもって公開することは許されないのである。これは人々がその民族芸術の物質的・美術的価値ではなくその背後に潜む超自然的な力にその存在価値を認めているからにほかならない。本来使用すべき状況以外において人の目に触れることによってそれがもっているとされる力が失われてしまうのである。民族芸術を展示物として一般に公開する際の一つの課題であろう。

バフツ王宮の現状では、外国人やバフツ地域以外の出身者のようなバフツ王国の部外者に対して、これらの民族芸術を観光や研究の目的に応じて王の判断により公開しているものもある。今後、博物館が公開され様々な民族芸術が展示されるようになれば、それらが本来有していると信じられてきた「目に見えない力（道理）」について、どのようにインタープリテーションしていくのかが問題となろう。その前提にはバフツの人々がそのような世界観、宗教観を持ち続けていくことと、そこを訪れる観光客が異文化であるバフツの人々の心を理解しようと努力することが重要になる。民族芸術を観光資源として位置づけ王宮内の博物館において展示公開するにあたり、先述したように変容してはいけないアイデンティティーが何であるかを地域住民自身が自覚することが自律的観光の要件になると考えられる(山下・鏡味 1995:107)。

### 3.3 公開博物館の展示用収集品

計画が実現後、王宮内にある公開博物館、神聖収蔵館、神殿の三つの建物において民族芸術が所蔵されることになる。これらの中で公開博物館の展示内容について、現時点では具体的な計画内容は決まっていないようであるが、すでにバフツ王自身が王国の人々からそこで展示するための収集品を王宮内に集めている(写真３参照)。それらは全て公開可能なものであり、そのほとんどは木彫である。製作者・製作年・製作場所等の基本的情報を得るには今後の調査を待たなければならないが、特記すべきことは、それらの像が表現している内容である。秘密結社の長の息子で王の使者の一人であるシュウ・エリック・アコンギ氏（Shu Eric Akongnwi）が説明してくれた収集品の内容は次のようなものであった。

その内容は「王が飲むヤシ酒の入れ物を置く腰掛け」、「ジュジュ（仮面の精霊）像」、「戦士像」、「悪霊の力を借りて呪術を行う人物像」、「行ってはいけない場所に行って病気に冒された人物像」、「全女性のために祖先に請願する人物像」、「邪悪な呪術師に危害を加えられた人物像」、「喪明けの儀礼に参加するジュジュ像」、「村の女性像」、「猟師像」、「使者像」、「浄

罪のための椅子」、「双子を出産した女性像」、「双子を出産した女性の夫像」、「薪を割る男性像」、「妖術の働きから我々を守ってくれる精霊像」、「未知の病に冒された男性像」、「王の前に出現した祖霊像」、「妖術師に変身した人物像」、「人々の支配者（王）像」、「女王（王妃）像」である。

これらの木彫はバフツの人々が持ち続けてきたアイデンティティーを表現しているように思われる。その内容を一言で言えば、人間界と霊界とが一体化した世界観とそこにおいて働いていると考えられている祖霊や精霊などの「目に見えない力（道理）」を示しているのである。人間はどのように生きるべきか、あるいはどのように生かされているのかを、これらの像は我々に語りかけているのである。創造性豊かな造形感覚や表現力のある技巧についても言及しなければいけないが、私がこれらの民族芸術に接して最も感動を覚えた理由は、彼らのもっている世界観があまりにも私自身が探し求めていたものに近いと感じたからである(2)。

バフツ王はこれらの収集品をどのような意図で収集したのであろうか。また博物館に展示することにより、それらに接した人に何を感じてほしいと思っているのであろうか。現代に生きる神聖王と彼を支える首長制社会の人々が一つの自律的地域社会を形成し、そこから生み出された民族芸術を媒介役として、それに接した私のような訪問者と地域住民とが相互に自文化と異文化について感動しさらに理解を深めることができれば、それは自律的観光の一つの姿を示していることになるのでないだろうか。

### 3.4 神聖収蔵館の所蔵物

王自身や王家の秘密結社が祭礼や儀礼で用いる様々な民族芸術や王家の宝物を収蔵している建物が王宮内にすでにある(写真４参照)。計画ではこの建物について修復を行うだけでこれまでの姿を大きく変えることはなく、所蔵物に関する情報整備を行うことになっている。この収蔵館は本来、特定の者しか立ち入ることのできない神聖な建物であるが、最近は増加する観光客や研究者の要望に対して立ち入りを許可することがよくあるようだ。従来、その神聖さゆえに秘密性を帯びていた民族芸術が観光資源としての価値を有するにいたり、公開にあたっての課題が生じている。

例えば、この建物に収蔵されている多くの民族芸術を、特定の状況（時空間や主体）においてのみ使用が許され原則として常時公開ができない民族芸術と、それ以外の常時公開が可能なものとに区別することができる。特定の祭礼で使用される祖霊像、王の即位式で使用する腰掛け、秘密結社の構成員が儀礼で使用する仮面や鐘などは公開できないが、王家の生活用具や野生動物（ヒョウ・象・ニシキヘビ）の毛皮など、あるいはヨーロッパ人との交易によって入手した銃・陶器などは公開が可能であるという。神聖さをもつ民族芸術は製作者と使用者の間で共有されている世界観がその存在理由になるということができる。観光客は民

写真 3　博物館での展示を前提にバフツ王自らが収集した木彫像（筆者撮影）

写真 4　王家の秘密結社の構成員が使用する仮面（筆者撮影）

族芸術の製作者と使用者に対して、異文化をもつ鑑賞者であることが多い。神聖なる民族芸術が有する世界観を観光客が理解するためには博物館を設置するだけではなく、異文化理解のためのインタープリテーション能力を向上させインタープリターを育成する必要性が高いといえる。

## 4. おわりに

本稿では豊かな民族芸術を生み出す神聖王国文化が現存しているカメルーンにおけるティカール族の一首長国・バフツでの調査事例をもとに、地域変容の一つとして観光現象を捉えた上で、観光現象の顕在化により民族芸術の観光資源としての新しい価値が認められることによりどの様な課題が起こるかについてまず分析した。次に自律的観光が成立するために民族芸術が果たす役割について考察した。これらの中で、木彫像をはじめとする様々な民族芸術はバフツの人々の世界観の現れであり豊かな精神世界を示しているのみならず、それらを垣間見た異文化をもつ私自身がその世界観に大変共鳴した事実を指摘しておかなければならない。この経験は一人の研究者であると同時に一人の旅行家としての私に、民族芸術における美の概念の深遠さと異文化理解の素晴らしさを実感させたのである。

人間の自然観・宗教観・世界観が関係している神聖な民族芸術が観光資源としての価値をもつ時、その秘密性と公開性の対立が課題となる。特定の状況で使用されることを前提に製作された民族芸術の意味を、例えば博物館に展示された状態においてどの様にインタープリテーションするかが課題となる。また、観光の影響で文化の商品化が起こり物質文明が進展することにより、カメルーンでいえば神聖王国文化そのものが衰退し、インタープリテーションすべき地域文化自体が変化してしまうような地域変容が起こる可能性さえある。1997 年の「北西州神聖王連合」の結成はこのような危機感を抱く神聖王国の王達が選択した一つの具体的対応策であるといえる。

これまで自律的地域社会として機能してきた北西州の各神聖王国において、今後バフツで見られるのと同様な課題が発生することが予想される。その際、「北西州神聖王連合」のような地域的ネットワーク機能を生かすことが重要である。観光のあり方を王国間で比較検討し、この地域の人々のアイデンティティーである神聖王国文化の継承を図り、さらに国内や海外からの資金・人材等の援助を得ることも必要であろう。民族芸術の魅力を生かした自律的観光を実現するには神聖王国のような自律的地域社会の存続が不可欠なのである。

謝　辞

本稿は、文部省科学研究費補助金国際学術研究「西アフリカにおける伝統工芸技術の比較研究」（代表：森 淳）や塚本学院海外研修員助成等による現地調査によって得たデータにもとづいて作成したものである。調査の機会を与えてくださった先生方や諸機関の皆様方に謝意を表しておきたい。また、国立民族学博物館共同研究会「自律的観光の総合的研究」（代表：石森秀三）において発表をし、参加者の方々から有益なコメントをいただくことができた。さらに、バフツにおける現地調査では、現王・アブンビII世をはじめとする多くの方々のお世話になった。記して、深甚なる謝意を表しておきたい。

注

(1) バフツ王宮の修復・博物館設置計画の内容については、バフツ王国外に住んでいるバフツ出身者により構成される組織ンダ・アダガワ（Nda-Adanghawa)が作成した議事録『Minutes of an Extra-Ordinary Meeting of Nda-Adanghawa Held in the Bafut Palace .』（2000 年 3 月 18 日）を参照した。

(2) 木村重信は、芸術が他の文化価値によって律せられる他律性でも自己自身の支配である自律性でもなく、個別化された文化諸領域を再び生において統一する汎律性を求めることが民族芸術学の目標であると述べている（木村 1986:9-10)。私がバフツ王国の木彫像に接して覚えた感動は、民族芸術のもつ統合的な力によるものなのかもしれない。また、石田正は、諸民族の芸術作品を理解しようとする際、内部に入り込むことが民族学と芸術学の共通の課題であり、そこに民族芸術学の基礎が見いだせるという(石田 1986:38-41)。私の感動は民族芸術を通して異文化を理解する実感の一つであったのだろうか。

## 文　献

Asombang, R.N.

1999 Sacred centers and urbanization in West Central Africa. In S. K.Mcintosh(ed) *Beyond Chiefdoms: Pathways to Complexity in Africa,* pp.80-87. Cambridge: Cambridge University Press

端　信行

1987 「王のダンス：カメルーン高地における王の儀礼」和田正平編『アフリカ民族学的研究』pp.127-145, 同朋舎。

石田　正

1986 「民族芸術学の基礎づけ」木村重信編『民族芸術学：その方法序説』pp.25-42,

日本放送出版協会。

石森秀三

1991 「観光芸術の成立と展開」石森秀三編『観光と音楽』民族音楽叢書６ pp.17-36, 東京書籍。

ヤーン, J.

1987 『アフリカの魂を求めて』黄寅秀訳, せりか出版。

海津ゆりえ・真板昭夫

1999 「What is Ecotourism?」『エコツーリズムの世紀へ』pp.18-34, エコツーリズム推進協議会。

木村重信

1986 「民族芸術学とは何か」木村重信編『民族芸術学：その方法序説』pp.7-21, 日本放送出版協会。

嶋田義仁

1992 「アフリカの宗教」日野舜也編『アフリカの文化と社会』(アフリカの２１世紀第２巻) pp.113-158, 勁草書房。

ソー, B.P.

1987 「カメルーン高地社会における王権の象徴：その意味と役割」和田正平編『アフリカ民族学的研究』pp.105-126, 同朋舎。

山下晋司・鏡味治也

1995 「バリ島プンリプラン村：観光開発の最前線」『季刊民族学』73:100-107。